
理想の投手

越智甚兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想の投手

【Nコード】

N3564B

【作者名】

越智甚兵衛

【あらすじ】

広島東洋カープ所属の本格派若手投手、『右田知夫』。右田は、一軍昇格直後に新設球団に移籍を余儀なくされる。移籍先の『奈良ドルフィンス』で右田はいきなり頭角を現し、見事先発ローテーション入り。奈良の先発投手として後輩の前田や先輩の石切等と共に優勝を目指していく物語。

第一話：一軍昇格（前書き）

右田知夫の野球人生。

第一話：一軍昇格

右田知夫24歳

ここ2、3年二軍に埋もれ、ルーキーイヤー以来の勝ち星を挙げられず、同期の河内貴哉や玉山健太らと肩を並べて投げてきた。高卒同期の栗原健太がスタメンを取った時は心底羨ましがった。そんな右田にもチャンスが訪れた。

2006年4月12日。俺はいつも通り球場で筋トレをやっていた。とそこへ、新投手コーチの清川栄治（45）が入って来た。

「おい、右田は居るか、右田」

「あ、はい」

一軍の投手コーチなので少し期待した。

「一軍で投げる」

なんて言われたら這ってでも行く。いや這ってでも行きたい。憧れの広島市民球場のあのマウンド。ファンの目の前でストレートを投げ込むあの気持ち良さ。果たして、コーチは期待に応えた。

「一軍にいただろ、ロマノって奴。調子悪くてな。大島も。そんで穴埋めで一軍に上げた小山田がブルペンから調子悪くてな。しまいに肩痛めて二軍行きだ。その穴埋めで放り込んだ苦米地が打たれまくってな。すまんが右田、一軍行ってくれ」

「えっ、俺で良いんですか。モリチヨ（森跳二）とか健太（玉山健太）とか居るでしょ。アーノ（フェリシアーノ）とかも」

「いや、山内が推薦したんだ」

「へえ、山内コーチが」

「とにかく、明日付けで一軍昇格だ。市民球場で待ってるぞ」

そう言い残し、いつも通りの態度と、用が済んだ後の安堵感からかだらけた歩き方で出ていった。

それでも俺は勇ましく見えた。一軍昇格を伝えた清川一軍投手コーチ。俺を推薦した山内泰幸二軍投手コーチ。どれも有り難かった。

しかし、ローテーション入りしないと意味がない。俺の戦いは始まった。

初登板初打席

「あーあ、1軍に上がったは良いが登板機会無いんじゃない意味ねー」
「仕方ないだろ、右田」

右田知夫は1軍に上がったのだが、4月12日に1軍登録されてから4月28日まで1回も登板が無い。対横浜戦は相変わらず乱打戦である。大竹と吉見の先発が始まったのだが両者滅多打ちにされ、5回終わって10-10の同点だった。

『6回表、ピッチャーの交代をお知らせ致します。ピッチャー、林に代わりまして、佐竹。ピッチャー、佐竹。背番号、13。今季8試合目の登板、0勝0敗0S、防御率2.33でございます』

ピッチャー佐竹がコールされ、佐竹健太がマウンドに上がる。今まで大竹 長谷川 佐藤 林と繋いで来たのだが、横浜の乱打は止まらず結局佐竹さんが上がっている。残っている中継ぎと言えば高橋さん、横山さん、永川さん、広池さん、俺。

「おい広池、右田、お前らそろそろブルペン行け。7回に上げる」
「はい」

広池さんがブルペンに向かう。広池さんは良いなーと思いつつながら広池さんの後ろ姿を眺める。

「おい」

「あ、ん、何ですか清川コーチ」

「お前もだよ、ブルペン行け」

「え？俺も？」

「当たり前だ。さっさと行け」

「は、はい」

それを聞いた途端興奮しだした。念願の広島市民球場のマウンドに上げられるのだ。

「ウイース」

ブルペンは来たことがある。良い場所だ。

「おう」

松本隆ブルペン捕手が挨拶してくる。広池さんの球を受けてるのは水本さんだ。

『スパアン!!』

『ドワアアアア』

『あー、あー』

『ドワアアアアアアアアアア』

『はああああああああああ』

『何してんだ佐竹ー!!』

あーあ、佐竹さんが満塁弾を浴び、一気に10 14になっていた。しかも打ったのが佐伯さんだったので最上段に持って行かれ、勢いは完璧に横浜に持ってかれた。

『5番、セカンド、種田』

出たがに股種田。マウンドに内野手が集まり、離れて行く。佐竹さんが投じた第1球、

『パコオン!!』

『ドワアアアア』

『あー、あー』

『ドワアアアアアアアアアア』

『はああああああああああ』

あーあー、入っちゃった。

『広島東洋カープ、ピッチャーの交代をお知らせ致します。ピッチャー、佐竹に代わりまして、広池。ピッチャー、広池。背番号、28。今季13試合目の登板、1勝0敗0S、防御率5.22でございます。』

途中から代わった広池さんがピシッと抑えてチェンジになったものの、この試合展開はまずい。しかもこの裏は7、8、9番と下位打線なのだ。

『6回裏、広島東洋カープ、バッターの交代をお知らせ致します。7番、末永に代わりまして、代打、森笠。バッターは、森笠』

一気に沸き上がる球場。しかし森笠さんはセカンドゴロに終わった。
『8番、キャッチャー、石原』

石原さんも結局セカンドゴロに終わり、流れはいよいよ横浜に。

『広島東洋カープ、バッターの交代をお知らせ致します。9番、広池に代わりまして、代打、浅井。バッターは、浅井』

そして球場は今まで以上に沸き上がる。代打の神様の登場で応援にも熱が入る。浅井さんはライト前ヒットで出たが、続く東出は三振し、あっさり6回裏は終わった。

『7回表、広島東洋カープ、ピッチャーの交代をお知らせ致します。ピッチャー、広池に代わりまして、右田。ピッチャー、右田。背番号、70。今季初登板、0勝0敗0Sでございます』

「きたー！！出たー！！」

やっと来た初登板。やっと来た1軍のマウンド。

マウンドに行くと、清川コーチが立って居た。

「おう右田、お前初登板だったな。まあ頑張れよ。緊張するな」

「はい」

さあ打席には代打吉村。第1球、マウンドを踏みしめて、投げた！
……スパーン！150キロ！おお、俺ってスゲー！さあそして波に乗った俺は吉村のバットをへし折りピッチャーゴロ、石井琢郎を3球三振、小池相手に156キロをド真ん中にぶちこみ空振り三振。

「うし！」

ベンチに駆け足で戻る。

「うしうしうし！」

「よう右田、良いじゃねえかお前。あの直球持ってて何で今まで2軍に居た」

「知りませんよそんな事」

「まあ山内のあの自信が分かったぜ。次も頼むぞ！」

「次はいつでしょうね」

「8回に決まってるんだろ」

「え……あ、はい」

8回表、横浜の中軸を3者三振に打ち取りチェンジになった。

『8回裏、広島東洋カープの攻撃は、5番、レフト、前田』
ここから

前田 ライト前ヒット

栗原 三振

森笠 センター前ヒット 栗原三塁へ

石原 三振

で俺に回って来た。ベンチは代える気がないらしい。俺も打つ気満々だし。

そして迎えた第6球、フルスイングで振った所たまたま当たってそのままバックスクリーンへ……

入ったー！！入っちゃった！！スリーランホームー！！俺ってスゲー！！マジでスゲー！！

そして俺のホームランで火が着いた広島打線はこの回打者一巡の猛攻で6点を挙げ、永川さんが締めて勝ちました。どうせなら9回も投げたかった。

第3話・移籍（前書き）

こちらの都合により話が大きく変わります。すみません。最近忙しいもんで……

第3話・移籍

話は飛んでシーズンオフ、11月10日。
何故だろう。

今俺は、凄く驚いている。

皆さんは、新球団の件をご存知だろうか。
知らないだろう。まあこの作品の中だけだから。

新球団と言うのは、この前奈良に出来た

「奈良ドルフィンス」の事である。

この前、

「ライフ」と言う大阪を中心に活動するスーパーマーケットチェーンが立ち上げた新球団だ。オーナーは中務なかつかさと言う人である（無論偽名です）。実はその新球団の全貌が書かれた紙を今日、貰ったのだ。
「何故俺が居る!?!」

この球団のコーチ及び選手は全て監督・田栄真一郎氏の選出である。愛甲氏や福本氏らも選ばれているのだが、コーチ陣は主にカープ出の人物である。朝山氏や野村氏、達川氏を招き、田栄真体制を整えたのだが、何故か投手コーチの欄に俺の名が書かれている。

「俺がコーチ!?!」

セ・リーグに新規参入するこのチームのコーチをいきなり任される覚えはない。嵐さんが居るだろうに。

ちなみに他にもう1球団新規参入する。球団名は「バルバルベルリンス」。もう少しでバリバリと裂けてなくなりそうなチーム名だ。

それはともかく俺がコーチとは腹に据えかねる。
この奈良ドルフィンスには嵐と言う投手が来る。

前山嵐はミスタープロ野球とまで呼ばれる名投手で、全盛期にはシーズン防御率0点台をマークした事もある怪物なのだ。

150km後半の快速球と多彩な変化球、更には文句の付けようが

無い、針の穴どころか服の繊維に球を通すコントロールを武器に沢村賞5回、ノーヒットノーラン1回、完全試合2回、最多勝15回、最優秀防御率15回、シーズンMVP7回、最多奪三振2回などなど数々のタイトルを獲得。万年Bクラスの近鉄を優勝に導き、2003年阪神優勝の立役者、その後の阪神の快進撃を支えた球界のエース。色々なチームを渡り歩き、カープに来たことも有った。高卒17年目の今季、自分の花道を飾るにふさわしい球団として移籍して来たらしい。

俺が言いたいのはこのミスタープロ野球に兼任コーチをやらせれば良いと言いたいのだ。後輩からの信頼は厚く、誰からも慕われ、イチロー並にファンが多く、実際指導力もある嵐さんがやれば俺の数倍頼りにされるだろう。

しかし田栄真さんは俺を推薦した。何故か分からない。ってか、俺移籍！？

「移籍確定者は23日までに荷物を整え奈良に集合する事」
紙の1番下にそう書かれてあった。奈良まで行くのかよ……。

奈良は意外と遠かった。大野寮の汚い自分の部屋に別れを告げ、車で高速道路に入った後、結構遠いなあと思いつつもダラダラと奈良まで走ってきた訳だが、俺の奈良のイメージとこの奈良は程遠い。俺は道路に平気で鹿が歩いていて、もつと空気が新鮮で、古都って感じがするのかと思っていたが、実際は鹿の為に網が張られ、空気は広島や大阪と大して変わらず、古都どころか車だらけの町。観光地とは得てしてこんなものなのか。

まあ奈良市ってのは県庁所在地だけにやっぱりこんなもんか、と車を進めると、やはり山が見え、寺が見え、神社が見え、五重塔も見える。やっと俺の奈良のイメージと合う所があった。

そしてその山の山腹に違和感有りまくりの建造物がどかっと建って

いた。

球場と寮だった。文化財・春日大社を尻目に普通と言わんばかりにどかつと座った球場には、大きく「奈良私営球場」と書かれていた。寮には更にでかい字で

「奈良ドルフィンズ選手寮」と書かれていた。

「ここ？」

俺は目を疑った。貧乏球団・広島東洋カープ所有の大野寮を遥かに凌ぐ程ボロかったのだから。新球団の待遇の悪さに呆然としている俺の側に、もう1台車が止まった。

「ここ？」

阪神のファームで4番を打つ、裏山加佐司だった。

「ここみたいっすね」

「………ああ」

「あーあ、まさか新球団の寮が大野よりボロいとは思わなんだ」

「俺もだよ」

「入ります？」

「入るか」

2人は苦笑いを浮かべながら怪しさ満天の寮へと入って行った。

「こんちわー」

外がボロけりや中身もボロいドルフィンズ寮。とりあえず割れた窓ガラスは張り替えた方がよいのでは？わざわざガムテープで押さえずに。ま、ガムテープあんまり意味無くなってるけど。隙間だらけだよ、寮長さん。

「誰かいませんか？」

「あ？」

何か奥から出てきたのは、下中流紺であった。

「なんだ右田か」

「なんだとはなんだ」

「まあ良い、入って良いみたいだから入れ」

「ういっす」

中のロビーに入ると、ほとんどの選手が居た。

「お、右田さんやないか。久し振りやなあ」

「同じ球団たるが」

「滅多にあうことないやん」

「お前が1軍に上がってくれば良い事だ」

「なかなか出来んなあ」

「まあ良い。それより嵐麻、寮長は？」

「知らん」

こいつは前田嵐麻である。球界随一の剛球左腕なのだが、なにぶんコントロールがボロクソに悪い為あまり活躍出来ない。ど真ん中に投げて詰まるという重量感溢れる快速球の持ち主だけに、勿体ない事この上ない。

「おーい、轆轤」

「ん？」

「寮長は？」

「知らん」

こいつは轆轤建一である。楽天で正捕手として年間125試合スタメンマスクを被った男である。

「えー注目ー」

いきなり部屋の隅から聞き慣れない声が出た。見ると、中年のおっさんが1人立っていた。

「えー、私がこの「奈良寮」を管理する掛川腎臓かけがわじんぞうと申します。まず、この寮でのマナーというものを知ってもらいたいと思います。まず、喧嘩はなるべくしない。これは常識ですね。2つ目、練習を怠らない。これも常識。最後に、部屋の鍵は必ず掛けておく。この3つの常識を守って下さい。以上」

選手は呆然となる。特にこれと言った規制もなく、ただ常識を3つ述べて勝手に始めたスピーチに勝手にピリオドを打った。

「あ、後向こうの案内板と部屋の戸に選手名が書かれていますので、それを参考にして各自移動して下さい。以上です」

案内板を見たら五十音順に部屋が割り当てられていた。

「う、う、う……あ、2階か。げ、隆夫の隣かよ」

隆夫とは俺の弟で横浜の6番を打っていた右田隆夫の事である。

「2階か……」

「よおコメ」

「ん？あ、昌樹。どした？」

「お前、何階？」

「2」

「良いな、俺5階だぞ」

「しかしボロいなこの寮」

「仕方ねえんじゃねえの、金無いし」

「まあな。皆年俸激減だもんな」

「監督ですらギリ1億」

「虚しいな」

「しっかし、こんなチームで優勝とか出来るのか？」

「初年度は無理だろ。でも5年目以降は分からん」

「ま、そんなもんか」

「比較的戦力は揃ってるから。ただ轆轤や福神らパ・リーグ勢がセ・リーグ相手にどう戦うかが問題だな」

「成程」

「ま、なるようになれだ」

「そだな」

「じゃ、俺荷物運ぶから」

「俺もだ。じゃあな、コメ」

ちなみにコメとは俺のあだ名である。由来は1年目の春季キャンプの時心配した親がキャンプ地にコシヒカリを送って来たから。先程の選手は林昌樹である。先輩なのだがやけに親しみが有るので敬語は一切使っていない。向こうも余り気にしていない。

荷物を運び終り、部屋を見回す。まさしくボロアパート。風呂は共同(3階にある)、辛うじてトイレが付いている。

「あーあ、ひでえな」

床は歩く度に軋む、壁は大きなヒビが1つ、窓にはセロテープが貼られてある。

「カープの大野寮がただけ綺麗がよく分かったよ……」
言いながらドアに貼られてある寮の見取り図を見る。まず1階にロビーと田栄真監督の部屋。2階は選手部屋。3階は食堂・浴場。4階・5階・6階は選手部屋。7階はトレーニングルーム。8階は倉庫。9・10・11・12階は選手部屋。13階はミーティングルーム、後は選手部屋である。

「和山さんとか大変だな」

このチームには和山と言う先輩ピッチャーが居る。ちなみに1番高い20階に居るのは助っ人外国人のソコシ（セルラ・ソコシ）である。可哀想に。ちなみにここはエレベーターが無い。

ここが、右田知夫伝説始まりの地で有った。

第4話・近江直（前書き）

無駄話です

第4話・近江直

突然だが、セ・リーグにはもう1球団新規参入する。

『バルバルベルリンス』である。

名将なのかどうなのか、と言うより誰か分からないジョー氏が監督に就任。

コーチ陣は全て聞いたこともない名前がズラリ。打線は『ロボット打線』と称される得点力の高さで注目されているが、投手陣は全く分からない名前が並ぶ。島野、ライアン、バートン、別府、バカ西郷、ショーター、左東……。とにかく分からないチームなのだ。キャッチャーには鈴衛、栃香、中根がいる。栃香？

そのバルバルに、近江と言う選手が居る。

おっみただ

近江直。強肩好守で一発屋。そのパワーは陳黒晏（奈）と互角。右投げ左打ち。

近江は、元々ヤクルトに所属していた強肩キャッチャーだった。

しかし打撃に課題が残り、なかなか1軍定着出来ず。

やっと開幕1軍に名を連ね始めた時には古田が居た。（ちなみに1年目）

これでは一生出世は無理だと悟った近江はトレードを志願。見事承認されて巨人に移籍するも、加藤や村田に見事に押し負かされ2軍生活。

とうとう解雇になり、広島に拾われる。

この時、サードにコンバート。

しかしサードにコンバートしたのが災いを招く。

キャッチャーが手薄な広島に移籍した直後にサードにコンバートしたことで、木村と倉と瀬戸ぐらいしか居ない正捕手争いから退く事になり、代わりに新井・ディアス・野村と激戦のサードのレギュラー争いに突っ込む事になった。案の定墮落して2軍生活。その年に解雇。そして近鉄に移籍した。その後も2軍生活が続く。そして近

鉄が合併。楽天に行くも、ホセ・フェルナンデスに押し退けられ2軍降格。そして今年、バルバルに移籍した。まさにタイトルや日本一とは全く縁のない選手なのだ。

その近江は俺と非常に縁の深い人物なのだ。こちらは24歳であちらは39歳と著しく離れているが、一応俺のルーキーイヤーの時にフレッシュオールスターでバッテリーを組んだ事がある。あの時は既にサードにコンバートしていたのだが、フレッシュオールスターの時のみマスクを被ったのである。

それ以来連絡も取るようになり、今は会えば酒を酌み交す程の仲である。ちなみに俺は轆轤とも仲が良い。

その近江さんが今度、『バルバルベルリンス』にて開幕4番を任せられるかもしれないと聞いた。ジョー監督が検討中だそうだ。楽しみだ。

以上、無駄話でした。

第4話・近江直直（後書き）

無駄話でした

第5話・春季キャンプ開始(前書き)

短いです

第5話・春季キャンプ開始

春季キャンプ。

それは我等若手選手達が凌ぎを削り、オープン戦出場、開幕1軍と言う黄金の切符を奪い合う聖なる戦い。その戦いで敗れた者は開幕2軍を余儀なくされ、勝利した者は開幕1軍、数々のチャンスを与えてくれる。

今日は、その聖なる戦いが幕を開ける日、即ち春季キャンプ開始の日である。今年の一次キャンプは岐阜らしい。

「全員整列！」

ここは岐阜県。

「来たか……………」

「今年も……………」

「春季キャンプ……………」

若手達の間では独特の雰囲気が漂う。

「コメ……………」

「何だ、下中」

「この勝負、貰った」

「それは俺の台詞だ」若手達が熱い火花を散らす中、田栄真監督が全員の前で挨拶兼演説を開始する。

「おう、見たことの有るような面々だな。そういや石切、お前ピッチャーじゃなかったか？何で野手組の、D（捕手組）の所に並んだ？」

「いや、俺は3・4年程前にキャッチャーに転向したんで……………」

「あ、そうだっけ？勿体ない。近鉄の元エースがこのチームにピッチャーとして居ればどんなに心強いか。精神的にも実力的にも柱として頼れる存在になれたのに」

「いや、別にもう近鉄なくなったら引退しようと思ってたんで……………」

・・・」

「あ、そうなのか。まあ良い。さて、今季からセントラル・リーグに加盟した2チームの内の1つ、『奈良ドルフィンス』として初めての春季キャンプが今、始まるうとしている訳だが、我が球団の初代選手会長、野辺靖雄を筆頭にそうそうたるメンバー全員がこの春季キャンプに臨むことになる。今年は野辺靖雄、右田知夫、右田隆夫、下中流紺、轡轡建一、福神大吉、石切和興、ダイジョーブ坂地、猿山剛椿、島本政志等々色々な選手がこの岐阜に顔を揃えて居る。今年の目標は『最下位以外』だ。新造チームだけあつて厳しい戦いになるだろうが、喰らい付いて頑張つて欲しい。何か有つたらコーチ達に聞くなり、先輩に聞くなり、俺に聞くなりしてくれ。では、健闘を祈る。キャンプの日程やメニューは後程配る」

監督の挨拶も終わり、いよいよキャンプ開幕。
まず走り込み。ずっと走り込み。昼飯食つても走り込み。夜になつても走り込み。

「はい、終了」

監督の一声で選手全員が一斉に走り込みを止め、監督の元に集まる。
「えー、本日は初日と言うことで、君達には走り込みをしてもらつた。まあここ2、3日は走り込みを中心にやってもらおうと思う。

では、明日に備えて今日はぐっすり寝てくれ。解散！」
てな訳で本日は終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3564b/>

理想の投手

2010年11月12日21時28分発行